未来のわが町女川を見据えて

出席者　須田善明氏　女川町長
佐藤由理氏　女川町健康福祉課 健康対策担当・保健センター副所長・地域福祉センター副所長
齋藤 充先生　女川町地域医療センター長
藤原直樹先生　練馬光が丘病院総合診療科 部長

司　会　山田隆司　地域医療研究所長

町づくりの歩み

山田隆司(司会)　東日本大震災から５年経ったという節目に，私が大会長を務めて開催する６月の日本プライマリ・ケア連合学会学術集会のシンポジウムで，皆さんに当時を振り返っていただき，また復興の歩みについて報告していただくことになりました．その内容を「月刊地域医学」でもぜひ取り上げたいと考え，今日はシンポジストの皆さんにお話を伺います．シンポジウムの座長を務めていただく藤原先生にも参加していただきます．

まずは須田町長，震災から今日までの女川町についてお話しいただけますか．

須田善明　東日本大震災から５年経ちました．女川町は全自治体の中で人口，建造物とも最大の被災率でした．町そのものが壊滅した中で，どういう町をつくっていくかということが大きな問題でした．一人ひとりにとっては生活の再建が最も重要でしたから，町としても住民の住む場所をもちろん最優先課題としつつ，しかし，ただつくればいいというものではありませんでした．人口減，これは日本全体のトレンドですが，わが町は震災を受けて一気に人口が減少しました．しかし震災前から自然減も社会減も含めて人口が減っており，それは抗えないものとしてあったわけなので，それをしっかり受け止めた上で，出来上がる町がどうあるべきかということを考えながらずっとやってきました．

基本的には高台移転が必須でしたが，その上で利便性の高い持続性のある町をつくっていかなくてはいけないと考えました．ハード面だけではなく，そこに携わる一人ひとりの関わりも重要です．行政のみならず民間セクターの地域に対する関わり，あるいは民間セクターが公共を担っていく部分も含めて，いろいろな取り組みがあってこそできるものだと考えています．そういう意味では地域医療振興協会の指定管理も然りです．震災がなければ，本来2011年４月から女川町地域医療センターの指定管理は行使になるはずだったわけです．ところが震災があってそれが延期となり，にもかかわらず地域医療振興協会には震災後

須田善明氏

先導的な役割を果たしていただき，本当に感謝しています．それがなければ女川町の医療，福祉は崩壊していたのではないかと思います．

同じようなことが町づくり全体についても言えると思っています．中心部の賑わいの拠点形成については行政も出資していますが，民間主体の町づくり会社，アイデアマネージメントが中心となって駅前のエリアが12月にオープンしました．震災前には考えられないような人の流れができました．町そのもので人を呼ぶということ，またそこを民間が主軸になって担っていくといういい形ができてきたと思っています．しかしまだ始まったばかりの目新しさで人が来ている部分もあると思いますので，一時期だけの人の流れではなくしっかりグリップしていくこと，またグリップするためのマネージメントをきちんとしていくことが目標です．

山田　町全体が壊滅し最も人口減少率の高かった女川が，今や被災地の中でも復興のリーダーのように言われています．官民が一緒になって活発に駅中心部の復興事業を進めてきたのはすごいと思っています．

須田　人の流れができ，それが既に震災前以上になっています．ただ住民の皆さんからすると，賑わっていいのだけれど住む場所のほうが先だろうというご意見も多くあるわけです．とはいえ住む場所を後回しにしてきたのではなく，町そのものが壊滅したので，言わば都市建設が必要なわけです．住む場所も産業の基盤も，賑わいも，同時並行でやってきた結果，そういう順番になった．しかし住宅，並びに土地の供給に時間がかかったという事実は否めません．

生活再建の拠点づくりが，ほかの自治体と比べて概ね半年から１年くらい遅れてしまった理由は，造成の地勢的制約の関係がありました．ようやく今年度から来年度にかけて本格供給のフェーズに入っていきますので，一人ひとりの生活に平穏が戻ってきたと感じていただけるようになると思っています．

山田　ほかの被災地では住民の中でリーダーシップを発揮する人がいなかったり，あるいは行政主導で高い防潮堤は整備することになったものの，それが住民目線の町づくりの流れには沿っていなかったり……というようなことを耳にします．女川は若い世代の人たちが中心になって町づくりに積極的に関わり，地域住民のコンセンサスのつくり方がしっかりしていた．それが今の復興の進捗に大きく関わっているような気がします．

須田　皆さんそれぞれの立場があるので，全員が全員，「そうだ，それでいこう」というわけにはもちろんいきませんでした．でもそれぞれがこういう町にしていくんだというメッセージの発信元となったと思っています．地勢的制約で時間をロスしたのは確かです．でもスピードを犠牲にしても町のあり方を皆で考えたということは大事だと思っています．そして同時に外からも一緒に歩もうという人たちが大勢入って来てくれて，一緒になって考えてつくってくれました．それが非常に